

フューチャーデザイン・ワークショップ2019

於 東京財団政策研究所

2019年1月27日(日) 13:20-14:00

仮想将来世代の声

フューチャーデザインの機序の演劇論的検討



FEAST

Enough is as good as a feast

太田和彦 (総合地球環境学研究所)

otakazu@chikyu.ac.jp



持続可能な社会を支えるフードシステムの構築



多様な立場・専門の方たちが関わることで実現しうる 超学際的(Transdisciplinary)な研究

大学・研究機関



Renmin University of China
China Agricultural University
China Academy of Sciences



Mahidol University
Chulalongkorn University
UC-Berkeley
Royal University of Bhutan
University of Utrecht
University of Kentucky

地方自治体

Kyoto Prefecture, Kyoto City
Nagano City, Noshiro City
Kameoka City, Kashiwa City



研究者のネットワーク



RC24.40



企業・銀行

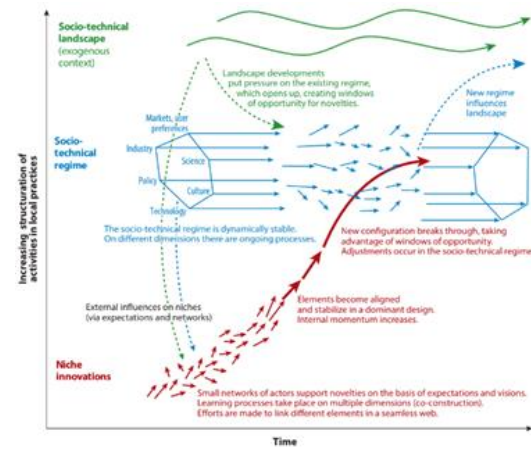


NPO, NGO



鍵となるコンセプト

未来志向 (cf. Sustainable Transition)



秋田県能代市



Local JA representative



Noshiro City officer



Young Women's NPO Leader



+



Supermarket manager



Housewife



Junior-high student

県立高校でのゼミと講演

「30年後の地域の理想の食卓」ワークショップ

京都府亀岡市



+



「食と農の未来新聞」

草の根運動

条例の制定



FDを通じて、私たちの存在や経験、行為のあらたな可能性は、どのように作り上げられるのか？

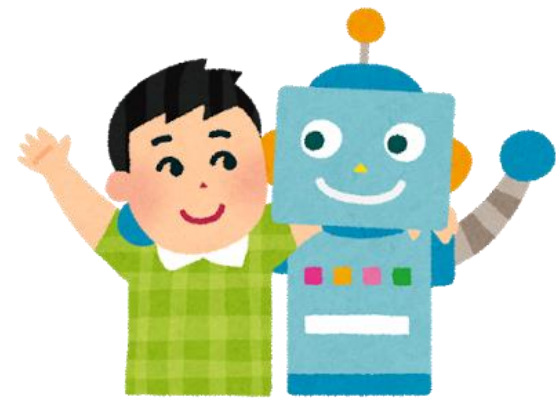
- A) 哲学・倫理学の文脈からみて、FDはどこが新しいのか？
- B) FDには、どのようなバリエーションが理論的に可能か？
- C) FDは、演劇的手法を用いたアクティブ・ラーニングや環境教育と、何が同じで何が異なるのか？
- D) FDでデザインされるものは何か？

A) 哲学・倫理学の文脈からみて、FDはどこが新しいのか？

**存在しない未来世代の代弁を
演劇的に正当化すること**

未来を想像・共有する演劇的手法

- 「仮想将来世代」というアイディアは、誰も未来世代を代弁することができない、という世代間倫理の前提に対し、現世代が未来世代を代弁することを演劇的な枠内で部分的に正当化している点が新しい。
- 「仮想将来世代」という役の位置づけに応じて、何が新しくできるようになりうるのか？



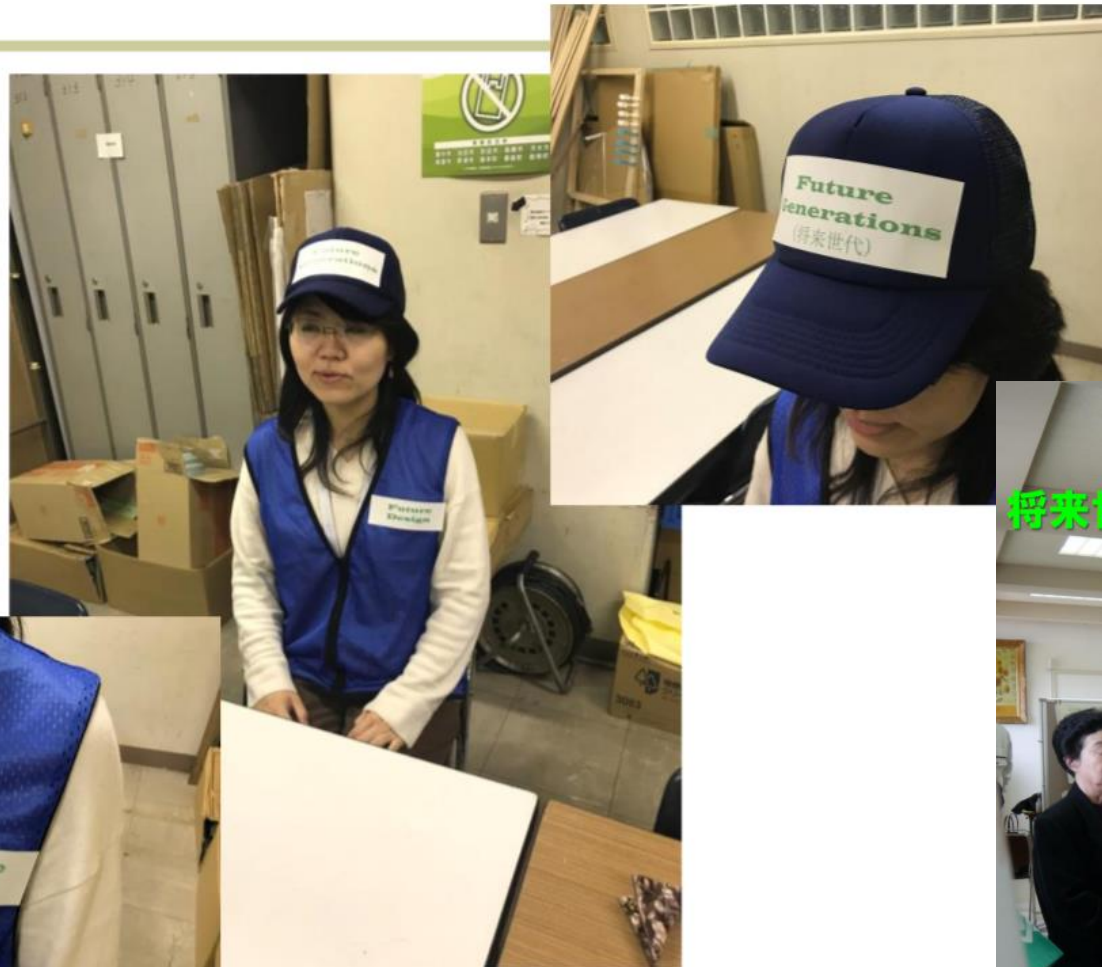
※ 注釈

世代間倫理において、未来世代の代弁の不可能性は、ほぼ共通了解となっている

1. 未来に関する知識の欠如
2. 未来世代との交渉の不可能性
3. 未来世代と現世代との影響の非対称性



FDの実践における**演劇的な枠**は、例えば仮想将来世代が身に着ける**キャップ**や**法被**によって担保される。



▼楠本直樹 「吹田市におけるフューチャー・デザインの取組」



フューチャーデザインワークショップの様子

将来世代D班の発表

将来世代の特徴「長所伸長型」

- ・将来の利益が考えられることで理想的なイメージとなる
- ・長所が議論される
- ・実現可能性が問われない
- ・将来の世代の代弁者として議論する

▼吉岡律司 「矢巾町におけるフューチャー・デザインの実践」

B) FDには、どのようなバリエーションが理論的に可能か？

社会教育と意思決定。
仮想将来世代の内容を
どのように設定するかと関連

「仮想将来世代」の位置づけに応じて、
FDは社会教育プログラムとしての側面と、
意思決定プログラムとしての側面を持ちうる

仮想将来世代の位置づけについて、以下のような場合分けが可能…

- ・ 状況と利害を共有する【P】
- ・ 状況と利害を共有しない
 - 仮想将来世代が異なる将来を仮想する【S】
(将来の想定が、状況 a、状況 b、状況 c…と分かれる)
 - 仮想将来世代同士の利害相反がある【T】
(将来の状況 a から、メリットを受ける主体とデメリットを受ける主体が併存する)



仮想将来世代の各人が...

- ・ 状況と利害を共有する【P】
⇒ 仮想将来世代はデタッチメントのきっかけ。
- ・ 状況と利害を共有しない
 - 仮想将来世代が異なる将来を仮想する【S】
⇒ 想定・希望される未来の多様なイメージを吟味し、社会像を想像することを促す。
 - 仮想将来世代同士の利害相反がある【T】
⇒ 現世代においても、未来世代においても検討する意義をもつ事柄を、専門知を交えて検証することを促す。

4 検討（続）

仮想将来世代の各人が…

- ・ 状況と利害を共有する【P】
⇒ 仮想将来世代はデタッチメントのきっかけ。
- ・ 状況と利害を共有しない
 - 仮想将来世代が異なる将来を仮想する【S】
⇒ 想定・希望される未来の多様なイメージを吟味し、社会像を想像することを促す。
 - 仮想将来世代同士の利害相反がある【T】
⇒ 現世代においても未来世代においても検討する意義をもつ事柄を専門的知見を交えて検証することを促す。

超学際研究

社会教育
プログラム
としてのFD

意思決定
プログラム
としてのFD

【宿題①】 仮想将来世代としての利害や視点の代弁と、人間以外の種（兎や蛙や樹木や魚など）としての利害や視点の代弁は、どの点において同じで、どの点において異なるのか。

【宿題②】 「意思決定の理由を記録し、残すことによる正当化」はどのように生じ、どの場合にどれほどの強度を持ちうるのか？

「仮想将来世代が異なる将来を仮想する」とき、各参加者はどのような将来からやってきたと構想するか…？
シビリアな未来からやってきた人との対話と、明るい未来からやってきた人との対話の、共通点と相違点は…？

将来について複数のシナリオがあったときに
どのように将来の姿を評価するのであろうか。

- 通常行っているのは、将来の変数のそれぞれについて平均をとって、将来を記述する関数の引数にそれらの平均値を入力をする。
- たとえば、T年先の将来の状態を表す変数 X_{t+T} と変数 Y_{t+T} の平均をとって、両変数の相互作用を予測する。

$$\bullet E_t(X_{t+T})E_t(Y_{t+T})$$

- しかし、本当に知りたい相互作用は、それぞれのシナリオについて、 X_{t+T} と Y_{t+T} の動向を評価し、その積の平均だとすると、上の評価方法はミスリーディングとなる。

$$\bullet E_t(X_{t+T}Y_{t+T}) = E_t(X_{t+T})E_t(Y_{t+T}) + Cov_t(X_{t+T}, Y_{t+T})$$

▼齊藤誠「なぜ、現在世代は将来の制約を甘く見積もってしまうのか？ : 横断条件評価における歪みについて」

C) FDは、演劇的手法を用いたアクティブ・ラーニングや環境教育と、何が同じで何が異なるのか？

**存在しない仮想将来世代という
役割が、
参加者の「声」や「語り」によって
構築されていく点がFDの特徴**

1 研究課題：仮想将来世代としての利害や視点の代弁と、人間以外の種としての利害や視点の代弁は、どの点において同じで、どの点において異なるのか。

2 既存研究：「役割演技」(role playing)を通じた共感性や広域的観点の涵養は、演劇的手法を用いたアクティブ・ラーニングや環境教育で、1990年代から実践が広まっている。

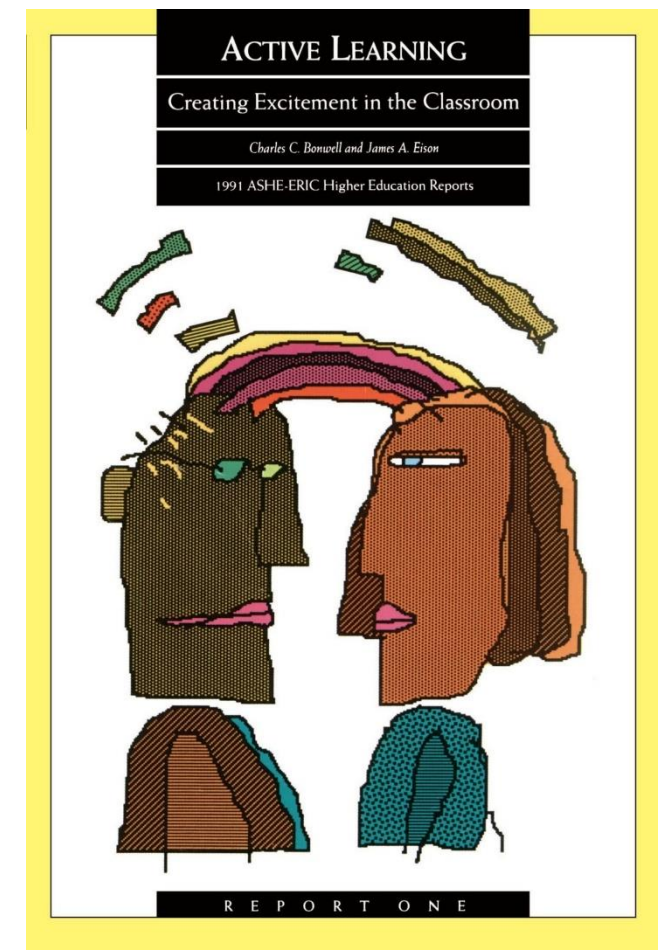
3 未解明点：

- **自分とは異なる社会的属性（職種・性別・年齢）**
- **人間以外の種**

これらの代弁と、

- **仮想将来世代**

この代弁は何が同じで、何が異なるのか？



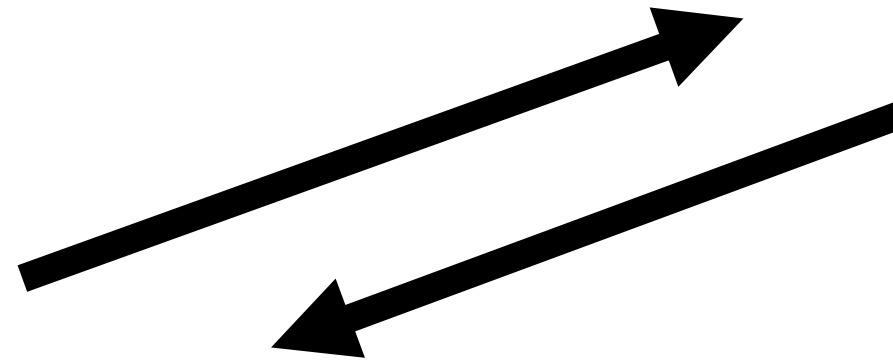
4 検討：類似点

「役割演技」を通じた、 意思決定の制約の 再構築の促進

(Janis & King, 1954; Wilshire 1982)

- ② 一定の「役割演技」、つまり、
- 自分とは異なる社会的属性
(職種・性別・年齢)
 - 人間以外の種
 - 仮想将来世代
- として/と共に、意見交換したり
見聞きしたことが...

① 演劇的な枠内で...



- ③ 「役割演技」の中で/後に、参加者の意思決定の内省的な制約を再構築させる
(→Spillover効果：▼中川「将来世代の視点取得」)

4 検討：相違点

仮想将来世代は、
実体として存在して
いない

(異文化の人々や牛や木々
などは参照できる実体がある)

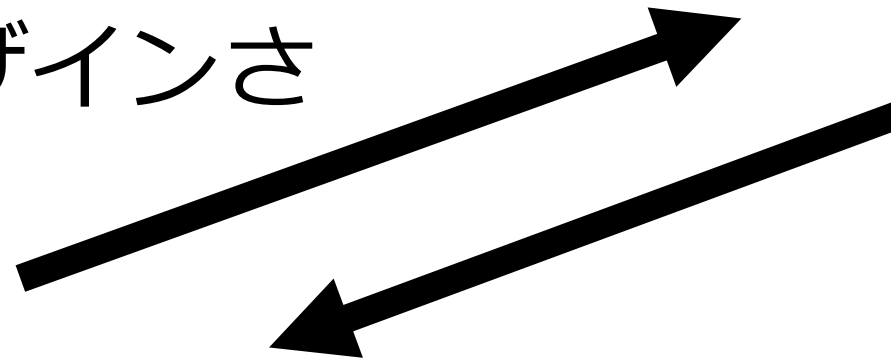
② 仮想将来世代には実体がない
ため、現世代と仮想将来世代が
重なる参加者の“声”がそれを担
保する。

※ “声”は両者が重なる場ではあるが、両
者を重ねる原因ではない。

① FDの場合、未来を見ようと
する眼がその都度デザインさ
れる。



現世代



仮想将来世代

③ 仮想将来世代がFDの現場において
構築されていくなかで、現世代の意思決
定の制約が可変化(再構築)される。

実体として存在しない「仮想将来世代」が構築されるプロセスにおいて、共有された視点の構築もまたなされる？

現世代・将来世代の「視点共有」

✓『今日の討議を行う際、自分は現代に生きる人の立場で物事を考えた』

✓『今日の討議を行う際、自分は将来世代の立場で物事を考えた』

の2項目は、**正の相関** ($r=.52, p<.05$)。

→ 現世代・将来世代の視点は必ずしも対立項目ではなく共存する

視点共有度と相関のある項目

「視点共有度」の低群と高群に差が見られ、高群の特徴がでた項目。

✓『現在の自分たちが享受しているものは、将来の世代にも引き継がなくてはならない』

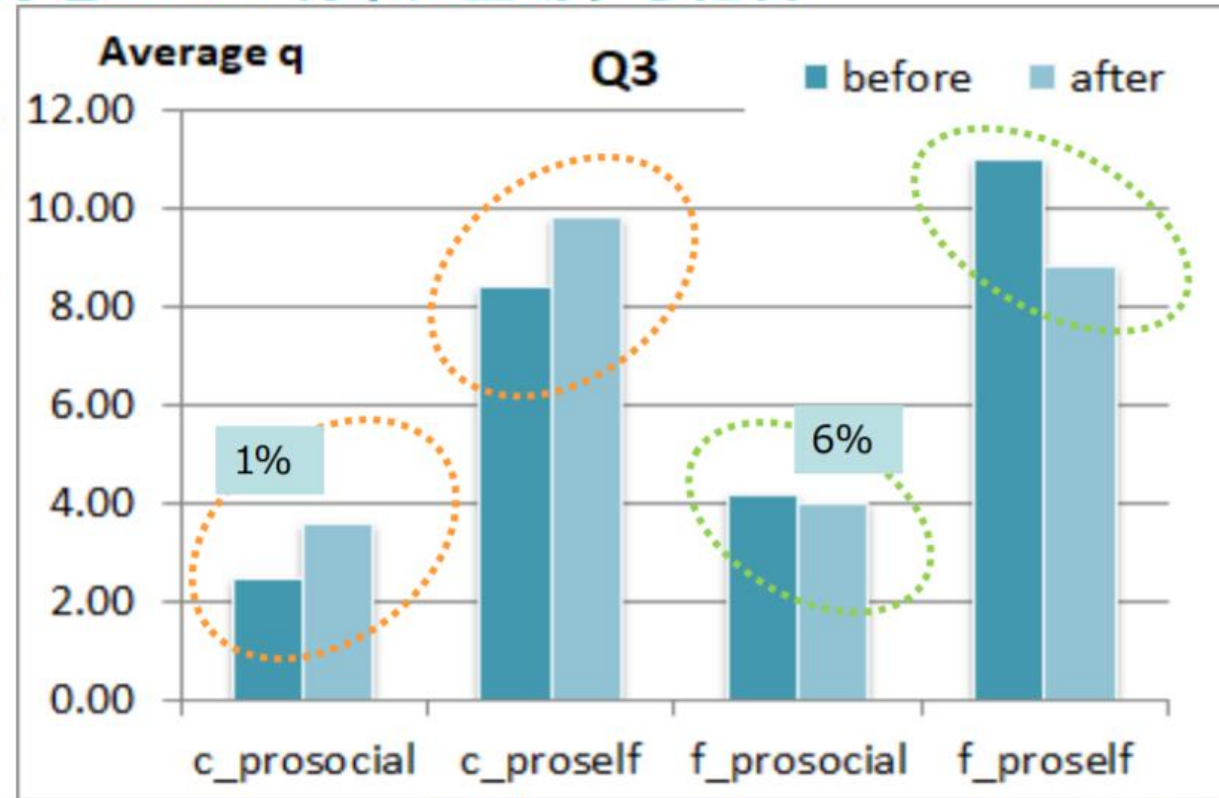
● 現世代と将来世代の関係性は資源を奪い合うような対立するものではなく、自分たちの遺産を引き継ぐ相手と考えている。

▼原圭史郎「フューチャー・デザインにおける仮想将来世代導入の効果と意義－自治体での実践例から」

FDにおける意見交換のなかで、「**仮想将来世代**」が構築されるプロセスと、「**取り組むべき問題**」、「**取り組み方**」、「**望ましい解決情態**」が構築されるプロセスは、どのような関係にあるのか？

松本市でのフューチャー・デザイン(FD)
 ● 将来世代による思考特徴の測定試み
 時間選好とSVO：将来に登場する他者

縦軸方向の
 数値が低い
 ほど将来
 価値が高い



現代世代で討議後
 非利己的な人も近視眼的化

将来世代で討議後
 非利己的な人の近視眼度低下

▼西村直子「思考への討議効果：時間的視野と社会的視野」

D) FDでデザインされるものは何か？

**未来を見ようとする眼。
見られた未来像ではなく。**

未来を見ようとする眼、あるいは「探究の語り」、「不確実性に向き合いうる共同性」…。

「仮想将来世代」の働き

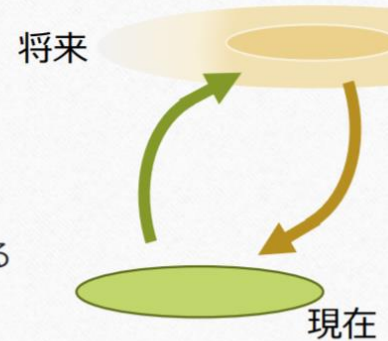
Nakagawa et al. 2017 より

- 現在の関心からの detachment
「暗黙の前提を問い直す」「日常的・短期的な関心から自らを自由にする」
 - 地域のアイデンティティの再発見
「矢巾のアイデンティティを守る」、自然的・文化的遺産の価値を再認識する
- …「自分たち」から離れながら「自分たち」を取り戻す動き

- (1) 自分たちで将来像を描く
- (2) 将来のほうから現在に意味を与え返す
- (3) 現在を「決断」の機として捉え直す



将来の方から現在に意味を与えるため、現在が将来に依存し、将来が現在に依存するという相互性が生じる



「語りのモードの変容」という観点から

- 実際に将来世代の人々と対話できるわけではない／どのような将来像を描くべきなのか
⇒ 現在の我々の語りのモードを「探究の語り」に変容すること
- 語りの共同性への着目
 - 語りは聞き手を必要とする。「共に将来像を描く」ということの重要性
 - “自分たちの将来” という意義の確保
- 変容“可能性” そのものの重要性
 - 将来像は変更されねばならないかもしれない。その不確実性に向き合いうる共同性を構築せねばならない

▼宮田晃碩「『私たち』を問い直す フューチャー・デザインの哲学への一構想」

5 結論と展望：

- FDは、一般的な「役割演技」と異なり、役割(=仮想将来世代)に実体がない。
- むしろ、**実体がない仮想将来世代が構築されていく。**

…この結論はFDにおいて、「未来を見ようとする眼がデザインされる」ときにどのような意義を持つのか？…

- 今日、多くの局面で、未来は操作可能であり、予測可能であり、その未知を規定すべき対象として認識されている
（「未来の植民地化」:Giddens 1991）
※ 持続可能性に関わる研究も、基本的にはこの認識に立つ。
- 仮想将来世代は、未知として働くことにより、**植民地化された未来の「解放」**(Ahlqvist & Rhihiart 2015) **を促す。**
※ 仮想将来世代が、現在からの予測を反映するものとしてふるまった場合、未来の植民地化はむしろ促進される。

5 結論と展望：

「持続可能性」概念と「未来可能性」概念をつなぐプロセスとしてのFDの位置づけ

cf.「実用的な未来研究」と「解放的な未来研究」のあいだをつなぐ、社会経済的な想像力(Socio-economic imaginaries: Patomäki & Steger 2010)の涵養のプログラムとしてのFD

「持続可能性」

(sustainability)

▼時間を把握する形式

過去・現在の延長としての未来

(過去-現在-未来という数直線型の時間イメージ)

「未来可能性」

(futurability: Handoh & Hidaka 2010)

未来そのもの

(数直線型の時間認識とは異なる時間認識の導入)

FDは両者を
つなぐプロセス
たりうる？

過去

現在

未来(の希望):未来可能性

未来(の予測):持続可能性

(太田 2017)

5 結論と展望：演劇論的検討を通じて、現世代と仮想将来世代が重なる“声”を共有していない、非参加者に対するフォローの必要性が明示化される

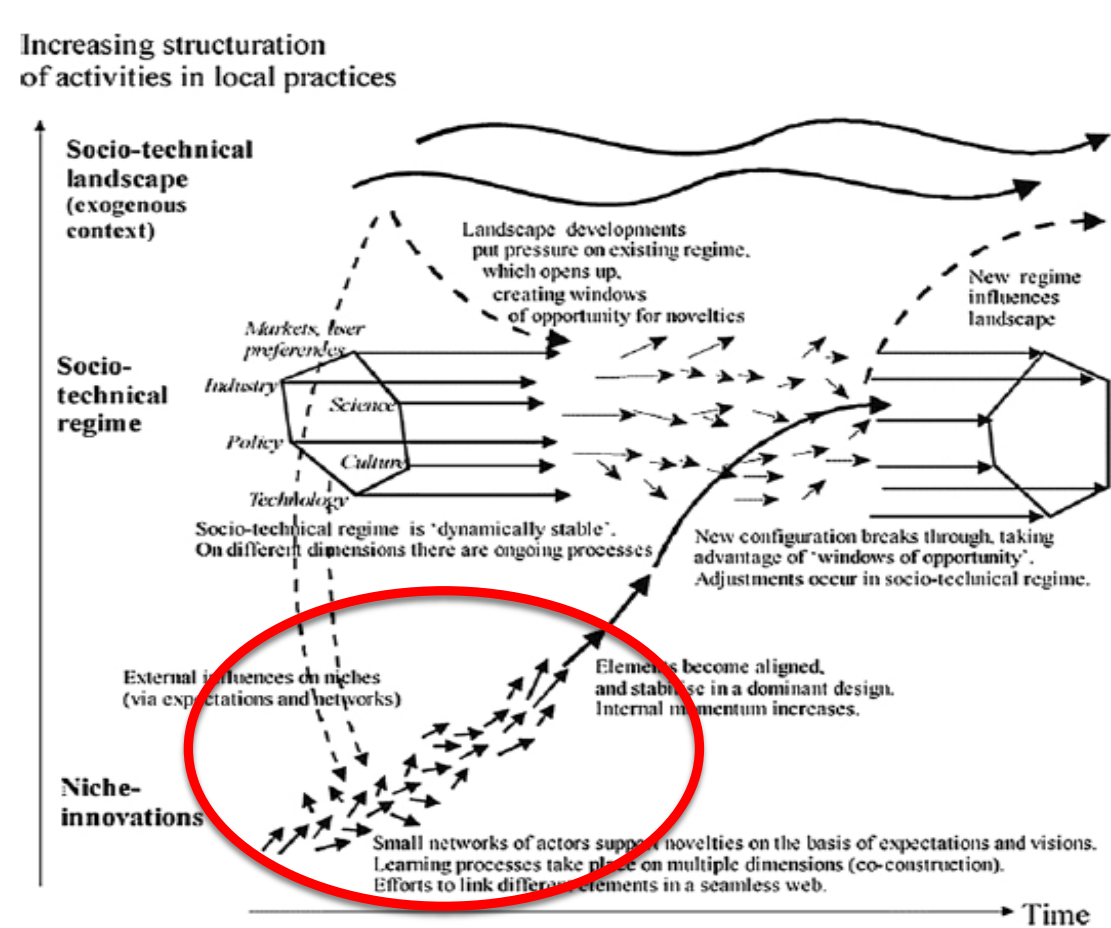


Figure 1. A dynamic multi-level perspective on system innovation. Source: Geels and Schot (2007, pp. 401)

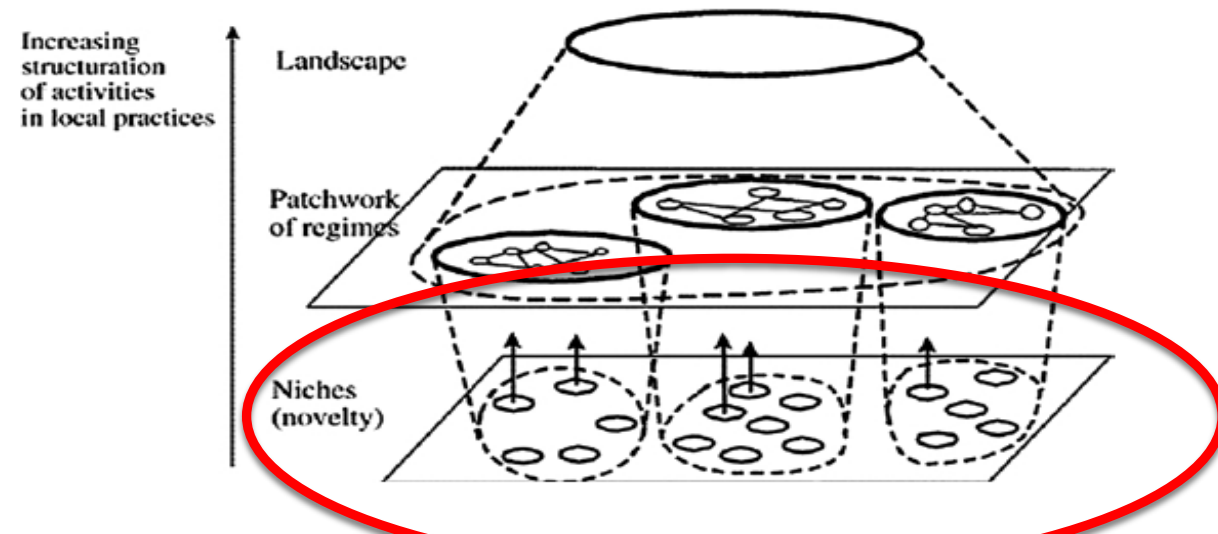


Figure 2. Multiple levels as a nested hierarchy. Source: Geels, (2002, pp. 1261)

- 「意思決定のプロセスを記録する」ことは、意思決定の場を共有していなかった人々と、意見交換する準備があることの提示。
- 記録を通じた説得よりも、記録の公開によってFDが密室化(過度に効率化)することを防ぐことが、主な目的。

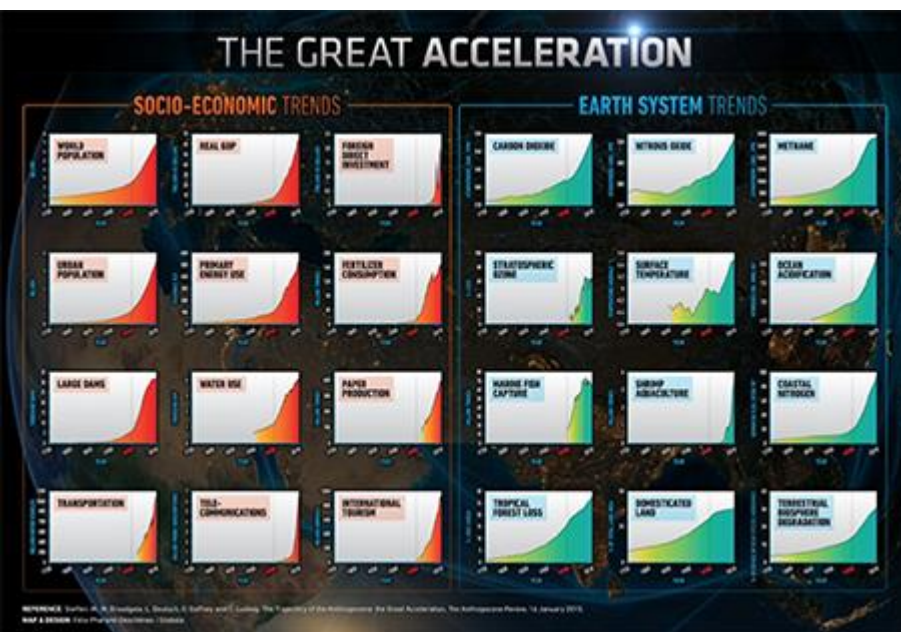
a. 未来可能性(futurability)の概念分析。

Rampton (1996), Handoh & Hidaka(2010),
Berardi(2017), 太田(2017), Saijo(2018)...

**b. FDは何を批判していることにな
るのか？**

哲学や倫理学における議論の蓄積は有効？
本質主義／構築主義、正義／ケア...

c. 政策への乗せ方



策への乗せ方

世代間協調問題が示す政治の限界

◆近代(18世紀～)の民主主義では、世代間の協調問題は想定されていなかった

⇒ 20世紀後半以降の新しい課題

➤ 世代を超えた投資は、現代社会では**実現不可能**

➤ 現代社会 = 世代間の**利他性が不十分**

➤ 利己的かつ合理的な現在世代は、将来世代のための自己犠牲は選択できない

➤ 近代以前は、非合理性(宗教や伝統文化)が世代間協調を実現していた。